

# カマキリさん、大きくなったらまた来てね

伊東市立川奈幼稚園（静岡県伊東市）

[3～4歳児]

3歳児は虫に対してさほど興味を示す姿が見られなかった。バナナ虫（ツマグロオオヨコバイ）をカマキリに与えて世話をする5歳児を見て、「バナナ虫だったら触れる！」と、5歳児と一緒にカマキリの餌探しに参加するようになる。そんな頃、3歳児保育室の入り口の壁にカマキリを発見する。5歳児のカマキリに餌をあげる姿を間近に見ていたことから、3歳児クラスで喜んで飼いはじめることになった。



保育者の援助

## 自分たちで餌を捕り、与える

5歳児に飼い方を教えてもらい、カマキリは生きているものしか食べないことを知る。自分たちで餌を捕りに行って与え、食べる様子を見て、「もっと捕ってあげよう！」という気持ちに結び付いていく。

自分たちだけで解決できないことを4・5歳児に聞いてみる方向へ向ける。飼育コーナーに図鑑を広げて置き、子どもから疑問の声が出るたびに一緒に本を見たり調べたりする。

## カマキリの卵が産まれたよ

飼育ケースの中に、「あっ！何かある！」と発見する。図鑑を見て調べ、カマキリの卵であることがわかる。別のカマキリから生まれた卵の形が違うことに気付き、疑問をもつ。図鑑と実物のカマキリや卵を見比べ、種類が違うことがわかる。

子どもたちと一緒に図鑑で調べ、確認する。卵をカマキリの様子とともに見守る。卵が産まれた日付を飼育ケースに貼る。

「赤ちゃん、まだかな？」…卵からすぐ産まれると思っている子が多い。冬越しすることを知ると、春になって赤ちゃんが産まれるのを楽しみにするようになる。

子どもが自分で何度も比べられるよう、図鑑を開いて置いたり、表示をしたりする。

カマキリの絵本を読み、卵は、秋を越し、冬を越し、春になると産まれてくる事がわかるようにし、春への期待につなげていく。

## 冬が来て…

その後も興味を持続し世話をするが、親のカマキリが死んでしまう。「お墓を作りたい」

カマキリに愛情をもって世話をしてきた子どもの気持ちを受けとめ一緒にお墓を作る。

## もうすぐ4歳児ひまわり組…

「卵はそのままとっておきたい」と春を楽しみにしている。カマキリの卵を「一緒にひまわり組の部屋に持って行きたい」と声が上がる。

カマキリの赤ちゃん誕生に期待する子どもたちの気持ちを大切に、子どもたちと一緒に4歳児クラスの飼育コーナーに卵を移動する。

## やっと会えたね！

「あれ？何かいるよ！」「カマキリだ！」「よ～し、餌を探しに行こう」と張り切る。わからないことは5歳児に聞いたり図鑑で調べたりして解決してきた経験から、「カマキリの赤ちゃんの食べ物」を調べるが、見つからない。

「カマキリの赤ちゃんは産まれたばかりだけど、何を食べるのかな？」子どもの気が付かない事実について投げかけ、考えるきっかけを作る。



## 大きくなったら、また来てね！

「どうする・・・？」「このままだと死んじゃうね」「今死んじゃうんだったら、大きくなってからまた来て欲しい」と声が上がり、逃がすことにする。小さいカマキリなら触れる！と、自分たちの手で逃がす。「大きくなったら、また来てね！」

子どもたちの声に耳を傾け、一緒にカマキリを逃がしに行く。子どもと一緒に、また大きくなったカマキリが姿を見せるのを楽しみにする。

**[考察]** 怖くて触ることができなかった虫への気持ちが、5歳児から刺激を受け、捕まえたり、観察したり世話をしたりする対象として変化してきた。わからないことを図鑑などで調べて得た知識が、好奇心と結びつくことで心に残る体験となり、年度を越えても生き物を大切に思う気持ちが途切れることなく継続的に育っていった。この活動を通して、子どもたちの心の中に、「相手を大切に思う気持ち」が確実に育ってきている。この経験が人との関係にも生かされ「相手を思いやる気持ち」へとつながっていくと考えられる。

## みどころ

5歳児とのかかわりを通じてカマキリの様子をよく見たり、一緒になって餌を捕まえたりすることで、子どもたちは少しずつ虫に興味をもち始めました。子どもたちの虫への興味・関心に保育者が寄り添ったことや、カマキリと過ごす過程で湧いてきた疑問や感動に丁寧に対応していったことで、3歳児なりに「自分たちで育てている」という意識や、「赤ちゃんが大きくなるために、～しよう」という命を大切に思う気持ちが育まれていきました。